

「心豊かにいきいきと学び合う子どもの育成」

～算数科で、考えを高める学びを通して～

I 研究の内容と方法

今年度は、研究仮説を「算数科において、一人ひとりの考えを高める学びの中で、表現する活動を工夫することによって、自ら学ぶ力が育成できるであろう。」とし、表現する活動を焦点化して、考えの言語化を目指して研究活動に取り組んできた。

1 理論研究

- (1) 基礎的な理論研究（考えること、表現すること）
- (2) 算数科で自分の考えを表現する場面、活動を明らかにする。

2 部会研究

- (1) 考える場面で表現に視点を当てた授業づくり

授業研究提案Ⅰ	2年	岩下和子	教諭	「かけ算の意味」
授業研究提案Ⅱ	4年	小椋規雄	教諭	「三角形のなかまを調べよう」
授業研究提案Ⅲ	3年	若月敬二郎	教諭	「かけ算」

II 研究の成果と課題

算数の学習の楽しさに「わかる」「できる」があるが、その過程にある「考えるプロセス」「考えること自体」の楽しさを味わわせること（表現する活動を工夫することをてでとして）によって、「考える力」「考えようとする力」を伸ばす。その積み上げによって「自ら学ぶ力」ひいては「生き生きと学ぶ子ども」の育成を目指す研究であった。

[成果1]

「考える力」や「考えようとする力」を育てるには、まず、その〈場面〉がなければならない。各単元中どこが多様な考え（表現）を引き出す場になり得るのか、一人ひとりの考えを表現させ生かすことができるのか吟味する必要がある。今年度、全学年においていずれかの単元で、その場を設定でき、子どもたちの「考えようとする」「表現しようとする」経験値を積み上げられたことは一つの成果であった。

[成果2]

考える力を「課題に対して、既習の学習や生活経験から必要なものを組み合わせ、答えを見つけ出す過程で、自分なりに表現する力」と捉えたように、考える力と表現する力は密接にかかわり合っている。低学年部会、高学年部会の授業実践においても、考えるために表現する、表現することで考える、お互いが相乗効果を持つことが明らかになった。考えを表現する力が高まり、絵や図で表したことをさらに言語化することにより、より深く学習が心に刻まれ、既習事項の活用ができる可能性が見えてきた。本年度、仮説の中で焦点化した、「学習内容の獲得を言語化する重要性」が検証できた。

〔成果3〕

子どもたちに、豊かに考えさせたり、豊かに表現させたりするためには、一人ひとりの考えや表現を豊かに認める、分かち合う場をつくり出すことの大切さが確認できた。教師自身がその子なりの考えや表現の良さを認めること、また、児童同士でも良さをを見つける目を持たせること、分かち合う雰囲気をつくり出すことが重要であった。

〔成果4〕

一人ひとりの考えを高めるための学びの工夫（ア）～（キ）の有効性が授業を通して確認でき、少しずつではあるが「自ら学ぶ力」の伸びがみられ仮説に迫ることができた。

〔課題1〕

「考え方の違い」と「表現の違い」を見極める目を教師が持ち、それぞれをどう評価し、子どもたちの学びに生かしていくか、今後も授業を通して実践・検証していくことが望まれる。

〔課題2〕

考えや表現を分かち合う「てだて」としてのコミュニケーションのあり方を今後も実践・検証していくことが必要である。多様な人数、柔軟な形態での小集団での話し合いや全体での発表、討議のあり方を模索していきたい。

〔課題3〕

考えを表現するための環境をつくり出すために、数・量・形を「豊かに数えること・豊かに見ること」の経験値をさらにふやし、「考えることができる」から「考えたくなる」へ、「表現できる」から「表現したくなる」へ高めていきたい。

III 成果物

▼式と図を使い、23を20と3に分けて計算している。

▼3を2と1に分けて計算している。

23 × 3 = 69

20 × 3 = 60

3 × 3 = 9

60 + 9 = 69

図に書くのがむずかしかった。

5P	23	×	3						
			21						
				20	×	3	=	60	
	23	×	2	=	46				
	3	×	3	=	9				
	23	×	1	=	23				
				60	+	9	=	69	
	23	+	46	=	69				

(研究主任 青柳俊雄)